

2005年度 森村・川村ゼミ議事録

6月15日

司会: 深井麻希子

記入: 豊島 典明

文献:

『ポストモダニズムと消費社会』フレドリック・ジェームソン

『他者の言説 フェミニズムとポストモダニズム』クレイグ・オーウェンス

発表グループ:

A 藤村、山田、元島

B 武道、柳瀬

議題

A・・・利益ばかりに目を向けられがちな資本主義社会において、自分たちの価値観が誰かがつくったものに影響されているのではないか。

B・・・男性主体の社会において、女性はどうあるべきか。つくられた価値観と実際の女性の姿との差異を知る事が重要なのではなからうか。

各グループの考察

A・・・ポストモダニズムと消費社会は密接に関係しており、消費速度の急激な速まりに対する危機感を見出す。また利益追求型社会構造に我々の価値観は影響されている。

B・・・女性たちは、男性の欲望に対し無意識に自分を合わせるように仕向けられている。発表にて取り上げられた女性は、男性的な視点を表象する社会イメージと女性との間の差異を明らかにすることにより、社会イメージにおける女性の不在を主張した。

議論の展開

★人を引き付ける力(A班の表紙についての説明が最初に行われた)

・「おもしろそう」と思わせる工夫(タイトルなど)

★私たちの判断は、社会によって決められているのか。

・現代社会「欲しいと思ったものがそこにある」(A班)

何かを欲しいという衝動までもが、社会に影響されているのではないか。

・あふれる情報

自分が何を必要としているのかを見失いがち。また、情報に影響を受けやすい。

自分が何を必要としているのか考える必要性が生まれる。

↓

★自分をはかるモノサシ(基準)は必要であるか？

あたりさわりのないものが基準なのであろうか。
まわりの視線が関係しているのではないだろうか。

★「何でもあり」が生み出す協調性の希薄化

例) 世代を超えたものの必要性のうすれ

コミュニティにとけこめない若者

登校拒否 (学校に行かないのも自由)

個性を主張するあまりに、まわりとの協調性を失う人が増えている。

★主体性に関する議論自体がモダニズム的

・ポストモダニズム的な考え方

白黒はっきりつける必要はない

一つを選べなければ、それぞれからいい所をとればよい(いいとこどり)

記入者の考察

「我々の価値観は社会にどれほどまでに影響されているのか」

当日の議論は、主にこのテーマに基づいて行われた。我々の価値観が、少なからず社会の影響を受けている事実は否定できない。しかし、議論を進めていく中で、それほどまでにネガティブにとらえる必要があるのかという疑問がわいてきた。否定的な考えは、ものごとの明るい面を隠しかねない。矛盾するようではあるが、そういった意味で我々は社会に対する批判的な見方に対して大いに影響を受けていると言えよう。

何事に対しても批判的な見方を持つことは、大切であろう。しかし、何でもネガティブな方向に結びつけ、自身の世界を必要以上に暗いものとする事は避けるべきである。良い面、悪い面、バランスよく、多面的にもものを見る力が我々には必要なのである。

議論においては、さまざまなものに影響されながら生きる我々の主体性についても触れられた。主体性とは、自分が意識して持つべきものなのであろうか。先ほどの話とは矛盾するようでもあるが、いろいろなものに流されながら(失敗したり、違いに気付いたりしながら)、いつしか知らず知らずに「主体性」、もしくは「自分」がつけられていくのではないかと私は議論を通して考えさせられた。

今回の議論においては、「ポストモダニズム」の時代においても残る「モダニズム」的な考え方と(それを悪い事とは思わないが)、それらの間で揺れ動く現代の人々の現状を改めて思い知った。